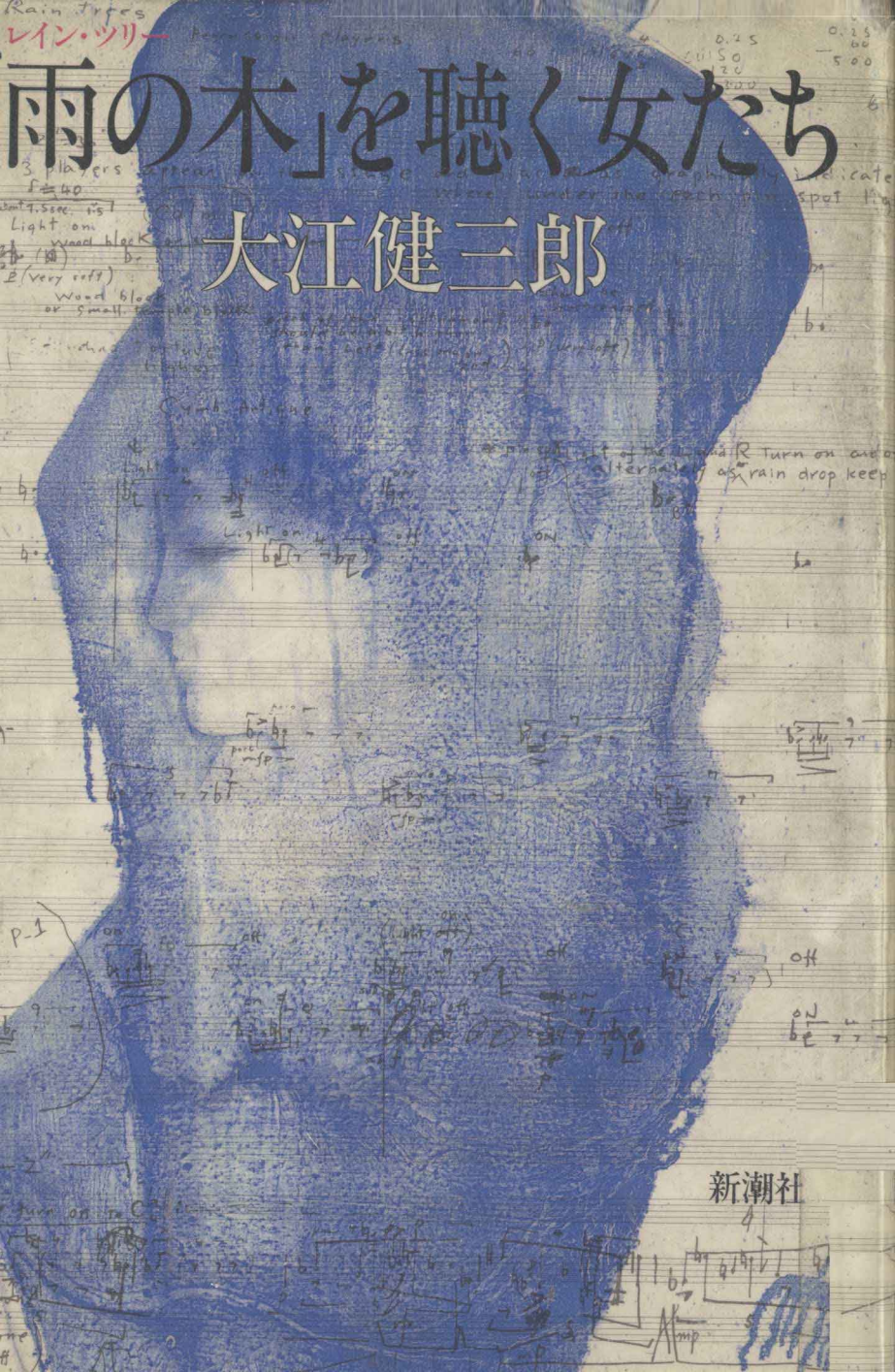
レイン・ツリー

「雨の木」を聴く女たち

大江健三郎



新潮社

「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち

大江健三郎

新潮社

「雨の木（レイン・ツリー）」を聴（き）く女（おんな）たち

昭和五十七年七月一五日発行
昭和五十七年八月十五日三刷

著　者　大江健三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
振替東京四―八〇八
印刷　株式会社光邦
製本　新宿加藤製本
定価　一三〇〇円

© Kenzaburō Ōe 1982 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

頭のいい「雨の木（レイン・ツリー）」……7
「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち……31
「雨の木（レイン・ツリー）」の首吊り男……75
さかさまに立つ「雨の木（レイン・ツリー）」……147
泳ぐ男——水のなかの「雨の木（レイン・ツリー）」……207

装幀・カット　司　修

＊装幀の一部は武満徹作曲「雨の樹」の楽譜原稿。© 1981 Schott Japan

「雨の木（レイン・ツリー）」を聴く女たち

頭のいい「雨の木（レイン・ツリー）」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

――あなたは人間より樹木が見たいのでしょう？　とドイツ系のアメリカ人女性がいって、パーティの人びとで埋っている客間をつれ出し、広い渡り廊下からポーチを突っきって、広大な闇の前にみちびいた。笑い声とざわめきをなお背なかにまといつかせて、僕は水の匂いのする暗闇を見つめていた。その暗闇の大半が、巨きい樹木ひとつで埋められていること、それは暗闇の裾に、これはわずかながら光を反映するかたちとして、幾重にもかさなった放射状の板根がこちらへ拡がっていることで了解される。その黒い板囲いのようなものが、灰青色の艶をかすかにあらわしてくるのをも、しだいに僕は見てとった。板根のよく発達した樹齢幾百年もの樹木が、その暗闇に、空と斜面のはるか下方の海をとざして立っているのだ。ニュー・イングランド風の大きい木造建築の、われわれの立っているポーチの庇から、昼間でもこの樹木は、人間でいえばおよそ脛のあたりまでしか眺めることはできぬのだろう。建物の古風さ、むしろ古さそれ自体にふさわしく、いかにもひそやかに限られた照明のみのこの家で、庭の樹木はまったく暗闇の壁だ。

――あなたが知りたいといった、この土地なりの呼び方で、この樹木の名は「雨の木（レイン・ツリー）」、それも私たちのこの木は、とくに頭のいい「雨の木（レイン・ツリー）」。

そのようにこのアメリカ人女性は、われわれが姓のことははっきり意識せぬまま、アガーテと呼んでいた中年女性はいった。……このように書くと、わが国の近来の小説にしばしば見るように、外国語に練達な同胞の、異国での愛の物語めくが、僕としてはその種の余裕をもって、あの十日ほどを過していたのではなかった。僕はハワイ大学の『東西文化センター』が主催した、《文化接触と伝統の再認識》なる問題設定のセミナーに出ていたのである。そして僕の英語力では、カナダからやって来たはずの三名の代表が、みなインド人であることを不審に思っていたのが、じつはインドのカンナダ地方から来た参加者であると、それも会議のなかば過ぎて納得されたりするほどのものなのであった。

事実この会議は、インドの人文主義者アナンダ・クマラスワミの思い出にささげられていたので、インド各地からの、多様な差異のある英語の使い手の参加があった。ボンベイから来たユダヤ系インド人の発言など、いかにもインド的であり、かつまぎれもなくユダヤ的なところもある、かれの人格のユーモアを僕は好んでいたが、会議の後でいちいち意のある所を問いたださねば、つづいての対応が難しいようなものでもあった。

アメリカ本土からの参加者は、ビートニクの代表として一時代を劃した詩人で、毎朝、肉体の疲れと心理の傷痕をあらわした（すくなくともそのような痛ましさに僕には見える）少年をともなっては会議にあらわれ、セミナー参加者の円卓の、うしろの床で居眠りする少年を優しげに見やっては、——He is my wife. といったりした。そしてニューヨーク育ちのかれの、およそ独自な方向づけに洗練と逸脱をかさねる談論は、大方僕にその英語をフォローすることを許さぬものなのであるが、しかしかれは次のような、かれのいわゆるハイクについて僕の批評を聞こうと

する。そこに詠まれた、硝子窓につぶれてこびりついた蠅の、羽根ごしに見た雪の山の絵までを、カフェテリアの紙ナプキンに描いて。つまり俳句の国の小説家の真正な批判を、どうしても聞き出そうとするのであった。そのようにして友人となったかれの発表の間、僕としてはなにやらほかのことを夢想して過すわけにもゆかなかったのである。

Snow mountain fields
seen thru.transparent wings
of a fly on windowpane.

そうした会議のその日のスケジュールを終えて、毎夜開かれるパーティまで、なんとかひと休みするつもりで、宿舎となっている学生寮の、それも女子寮に戻って来ると、顔面の神経に障害のある、いかにも苦悩した小柄なアメリカ人が、ロビーで待ちうけているということもあった。かれは五年前まで、裏日本の地方都市でヴィエトナム戦争からの脱走兵を援護する仕事をしていた。そのうちかれがＣＩＡのスパイだという噂を仲間うちでたてられているのを知って、ひそかに東京へ逃れ、そのままアメリカへ戻った。あの運動の指導者たちは、いまもなお自分のことをスパイとして記憶しているのだろうか？　あらためて連絡をとろうにも、自分としてはかれらの名前さえよく覚えていない。もともと自分は難聴者である上に、日本語はもとよりのこと、日本人の話す英語は充分に理解できず、実際に運動をしていた間にも、それに由来するさまざまの行きちがいがあって、当惑することが多かったのだが。

そのようにかきくどくアメリカ人青年は、このスパイ嫌疑をめぐっての、いかにもとらえどころのない記憶に悩まされるあまりに、いまは精神病者のための民間の施設に入っている。このハ

ワイには、高い費用を要するものから、多様なレヴェルの、そのような施設がある。自分はほとんど実費のみですむ部類の施設に入っているのだが、しかしその費用を稼ぐために、昼間はそこから働きに出てもいる。僕としてこの憐れに苦しむアメリカ人青年の、小柄な躰の全体が油煙でくすんでいるような人物を（それはかれの労働の職種と関わりのあることのようであったが）、どのように慰めることができただろう？　しきりに鳥のように小首をかたむけ、それも僕の口先に耳を押しつけるようにするのだが、僕のすなわち日本人の話す英語を、難聴の耳によく聞きとれぬようである鬱屈した男を。

……暗闇の前方を埋めている、わずかにその発達した板根の裾のひろがりのみが見えている樹木を、僕に示している中年女性も、あの苦悩するアメリカ人がいったような、精神病治療の民間施設の、これはあきらかに高級な方に属するものを、当のニュー・イングランド風の古く大きい建物で、経営しているひとりである模様なのだった。

アメリカ各地の大学や研究機関の公開セミナーには、いわゆるスポンサーたちの集りが附随していることが多い。おもに中年すぎから老年の婦人たちの、決して大きい額をというのではない寄付をした人びとが、セミナー参加者の背後を囲む傍聴者としてやってくる。時には、質問のかたちをとってではあるが、自分の意見を発表しにかかることもある。そして夜は順送りに、それらのスポンサーたちがパーティを催し、セミナーの参加者たちを自宅に招待するのである。そしてそのパーティが、英語を母国語とするのではない参加者にとっては、なかんずく僕のような語学力の者にとっては、昼間のセミナー自体におとらぬ苦行なのであった。それというのもスポンサーたちは、当日のセミナーの発言をめぐって、いかにも飽くことない質問を繰りだしつづける

のであったから。

アガーテと仲間たちがよぶ、そのようなスポンサーのひとりのドイツ系アメリカ婦人が、パーティの開かれている大きい続き部屋から僕を連れ出して、ポーチから暗い庭の樹木を見せようとしていたのも、その日のセミナーで僕が話したことに、直接関わりがあった。セミナーと並行しておこなわれているクマラスワミの蒐集品展観のなかに、インドの民芸に属するもので、バナナの葉をつづり細密画のデッサンをほどこした、「樹上のクリシュナ」の絵があった。川のなかには、クリシュナに呼びかけている全裸の女たちがいる。――その女たちの肉体の、いちいちの表現がいかにもインド的であり、それはあたかもインドの女性の肉体のかたち、とくにその胸と腹部が、世界じゅうのインドより他の国土の、いかなる女性たちの肉体ともちがうものであるかのように、把えられている。そして実際にインドを旅行してみると、まさにこのような肉体をした女たちが生きている、とヒンズー文化研究者でもあるビートニクの詩人がまず発言した。それに対しての、東洋の別の地域からのコメントをもとめられるということがあり、その過程では、傍聴しているインド女性たちからのアメリカ詩人への反撥があったこともあり、僕としては問題を樹木に置きかえて、考えをのべたのだ。

――僕はいまアレンが話したことのうち、インドの民衆芸術の、人間のかたちの表現が、そのスタイルにおいてインド的な個性を持つという指摘に、いうまでもなく賛成する。それがインドの人間の肉体のかたち自体にまで、逆行するようにして影響をあたえている、という意見にも、なかば賛成する。それはインドの人間の肉体のかたちが、その民衆芸術のスタイルを決定しているという意味のことの、アレンらしい表現だと理解して良いはずのものだろうから。しかし僕と

しては、インドの女性の肉体について経験的に語る資格はないわけだから、おなじことを樹木について見たいと思う。

クリシュナが攀登っている、この黒い樹木は、おそらくインドボダイジュとわれわれの国で呼ぶ木だろう。それは確かに、インドの民衆芸術のスタイルの感覚・技法によって描かれている。つまりは特徴が誇張されているのだが、しかしこの幹の質感と枝の曲り具合、また葉の尖端が尾のように伸びているところにしても、それはリアリズムの観察に立っているのだ。それでいてあらためてその樹木全体が、いかにもインド的なものに、僕には見える。これを具体例として、僕はアレンの意見につらなる仮説をたてたいと思う。僕は、ある土地の樹木と、そこに生き死にする人間とに、似かよっているところがあるように思うのだ。クラナッハの樹木は、いかにも高フランケン地方の人間の肉体が、そこに立っているようではないか……

僕はあわせて自分の、樹木および土地土地のその呼び名への愛着についても語った。僕は外国に出るたびにその風土での、いかにもその土地らしい樹木を見ることを楽しみとしている。それも当の樹木の、土地での独自の呼び名を知ることで、はじめてその樹木をよく知ったと、その樹木に真にめぐりあったと感じるのだ。さきにいったように日本人は、このクリシュナの攀登っている木を、インドボダイジュと呼ぶ。それはわれわれにとって、この木を Ficus religiosa Linn. と分類するのとはまた別の、ひとつの表現行為なのだ。僕は学名について、それを樹木についての説明と受けとめて、その樹木の名とは別のものだと思っている……

そのような前もってのいきさつがあり、アガーテは僕をパーティの席から引き抜くようにして、建物の前庭を占める巨大な樹木の前にみちびいたのであった。といっても日が暮れてからこの家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com